

令和元年6月17日現在

機関番号：34301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K13324

研究課題名(和文)「黒ノート」に依拠したハイデッガーのナチズム問題の再検討 メタポリティークを軸に

研究課題名(英文) Reexamination of Heidegger's Nazi Problem Based on "the Black Notebooks": From the Viewpoint of Metapolitics

研究代表者

田鍋 良臣 (Tanabe, Yoshiomi)

大谷大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：90760033

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ハイデッガーとナチズムとの思想的なかわりを、「黒ノート」に記された「メタポリティーク」という政治・哲学的な構想の分析を軸に再検討した。主な研究成果は、以下の3点である。

(1) フライブルク大学総長の時期(1933-34年)のハイデッガーは、ナチズム革命を「哲学の再始源化」の好機と捉え、その遂行をメタポリティークと規定する。(2) とはいえメタポリティークには、ナチズムの人種主義に対する批判と、それに伴う人種概念の身体論的な考察が含まれる。(3) いわゆる「存在史的反ユダヤ主義」をめぐる問題の一端は、ハイデッガーの人種論に関する論点が整理されていないことに起因する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、「黒ノート」という新資料に依拠して、従来は必ずしも明瞭ではなかったハイデッガーとナチズムとの思想的なかわりを明らかにしたことである。政治と民族(あるいは人種)をめぐる総長期のハイデッガーの思想動向を解明した本研究の成果は、民族主義(あるいは人種主義)が台頭しつつある現在の世界情勢に対して、哲学的に考察するための一つの視座となるだろう。

研究成果の概要(英文)：This study reexamined the ideological relationship between Heidegger and Nazism, focusing on the analysis of the political and philosophical concept of "metapolitics" (Metapolitik) described in his lectures and the posthumous works "the black notebooks". The main research results are as follows:(1)As a rector of Freiburg University (1933-34) Heidegger defines the Nazi revolution as the opportunity to "the restarting of philosophy" and names its implementation metapolitics.(2)Metapolitics, however, include criticism of Nazi racism from the viewpoint of human body.(3)Part of the problem concerning the so-called "antisemitism of the history of being"(der seinsgeschichtliche Antisemitismus) stems from the lack of clarity on issues related to Heidegger's race theory.

研究分野：宗教哲学

キーワード：黒ノート ナチズム 人種主義批判 身体論 存在史的反ユダヤ主義

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 2014年春にハイデッガーの遺稿「黒ノート」が、ハイデッガー全集第94巻～96巻として刊行され始めた。「黒ノート」とは1931年秋からハイデッガーが密かに記していた思索の記録である。そこにはキリスト教に対する批判や、ナチズムへの言及など、従来知られていなかったさまざまな思想が見受けられる。なかでも刺激的で物議を醸すことになったのが、「計算的思考」に結びつけられたユダヤ(人、教)に関する文言である。「黒ノート」を編集したトラヴニーは「黒ノート」の刊行にあわせて『ハイデッガーとユダヤ世界陰謀の神話』を出版し、ハイデッガーの思想を「存在史的反ユダヤ主義」と呼んだ。最近ではこの「反ユダヤ主義」にナチズムの影響を読み取るようとする研究も出てきている。しかしながら、2015年にハイデッガー全集第97巻として刊行された「黒ノート」のなかで、ハイデッガーは自身のユダヤ論に関して「反ユダヤ主義とは関係ない」と注記し、ナチズムの中核思想であった反ユダヤ主義を「きわめて愚かで忌まわしい」と非難している。この発言は、ハイデッガー自身が「黒ノート」=反ユダヤ主義=ナチズム という現在支配的な解釈図式に対して異議を唱えていることを示しているが、これを真剣に受けとめ、「黒ノート」のユダヤ論の真意、およびナチズムの問題の解明に取り組んだ研究は見られない。

(2) そこで研究代表者は、2015年度から科学研究費助成事業(研究活動スタート支援)を受け、「計算的思考」の分析を軸とする「黒ノート」の研究を開始した。研究の結果、ハイデッガーのユダヤ批判の背景には、計算の問題に依拠したユダヤキリスト教の神(「計算できる神」と規定される)に対する、ある種の宗教批判があることを突きとめた。他方で研究代表者は、研究を進めるなかで、ハイデッガーのユダヤ批判はナチズム批判が鮮明となる1930年代後半から始まっていることに気づいた。逆に言えば、ハイデッガーがナチズムに接近した1930年代前半には、ユダヤに対する言及は見られない。要するに、ナチズムへの接近は必ずしもユダヤ批判に直結しないばかりか、トーマスも指摘するように、両者はまるで「反対方向」を向いている。この事実は、「ナチズム=反ユダヤ主義」という固定観念に縛られた現在の「黒ノート」研究を相対化するのに十分であるだけでなく、ハイデッガーのナチズム受容に関して、ひとまずユダヤ批判と区別して検討すべきであるとの示唆を与えてくれる。ではなぜハイデッガーは、1930年代前半にナチズムに接近したのか。このことは言うまでもなく、ハイデッガー研究においてくり返し問題となってきた。「黒ノート」にはこの問題に関しても、従来は知られていなかった重要な手がかりが記されている。それは「メタポリティーク」と呼ばれる政治哲学的な構想である。ハイデッガーは、このメタポリティーク構想に依拠して、ナチズム革命をいわゆる「存在史的」な観点から哲学的に意義づけようとしている。この構想は1930年代後半に挫折し、以降ハイデッガーはナチズムから離反するとともに、ナチズム批判へ転じる。それゆえ、「黒ノート」に記されたメタポリティークをめぐる言説を時系列的に整理・分析することで、ナチズムとのかかわり方の変遷過程を明らかにすることができるものと思われる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、「黒ノート」に記されたメタポリティーク構想の通時的な分析を軸に、従来問題視されてきたナチズムに対するハイデッガーの思想的なかわりの変遷過程を再検討することである。

## 3. 研究の方法

この目的を遂行するために、本研究は1930年代前半をナチズムへの接近と受容の時期、1930年代後半をナチズムからの離反と批判の時期と性格づけるとともに、この時期区分に即して以下の4つの研究課題を設定し、2017年度は(1)と(2)に、2018年度は(3)と(4)に取り組む計画を立てた。

- (1) メタポリティークをナチズムの存在史的基礎づけとして見定める。
- (2) メタポリティークの内実を「民族」概念を中心に解明する。
- (3) メタポリティークの挫折を「誤り」概念の変容過程に即して跡づける。
- (4) メタポリティークの自己批判としてナチズム批判を位置づける。

## 4. 研究成果

(1) 2017年度はまず、1930年代前半の「黒ノート」や同時期の講義、講演に基づき、メタポリティーク構想の内実を整理・分析することで、フライブルク大学総長期(1933-34年)のハイデッガーがナチズムに接近した哲学的な背景を解明することに専念した。この点に関する研究成果は以下の4点にまとめられる。

メタポリティークは「哲学の再始源化」という哲学的な試みに依拠して構想されている。ハイデッガーはナチズム革命をこの再始源化の歴史的な好機と見る。再始源化を遂行する根拠は「ドイツ民族」と「ギリシア民族」との民族的言語的な共通性のうちに求められる。再始源化を担うメタポリティークには、ナチズムの人種主義に対する批判が含まれている。

(2) 2017年度はさらに、次年度の研究の準備として、1930年代後半以降ハイデッガーがナチズムから離反していく思想的背景の一つとして想定されるユダヤキリスト教批判、とりわけその唯一神(一神論)をめぐる批判的な言説を、「計算」の問題を軸に検討した。その結果、ハイデッガーは唯一神を特徴づける「創造」「救済」、そして「唯一性」のいずれの点においても、計算的思考の観点から解釈していることが明らかになった。

(3) 2018年度は、ハイデッガーが1930年代後半以降の「黒ノート」のなかで、自身のナチズム加担について「誤り(Irre)」であったと振り返る点を念頭におきつつ、同時期にくり返された講演「真理の本質について」(1930-43年)での「誤り」概念の変容過程をたどることで、メタポリティーク構想の挫折とそれに対するハイデッガーの総括を検討し、そのうえでメタポリティークに対する自己批判としてナチズム批判を捉える予定であった。だがこの試みを十分に遂行するためにはあらかじめ、前年度の研究のなかで浮上した、「人種」をめぐる総長期のハイデッガーの思想を整理・分析しておくことが必要である。そしてこの点に取り組むなかで、研究代表者は、先行研究に共通する問題点に気づいた。しかもそれは「黒ノート」刊行直後から持ちあがった、「存在史的反ユダヤ主義」の論拠にかかわる深刻なものである。そのため本研究では、当初の予定を変更して、ハイデッガーの人種論の解明、およびそれをめぐる先行研究の問題点の検証に尽力した。主な研究成果は、以下の4点になる。

フライブルク大学の総長としてハイデッガーは、ナチズムの人種主義を生物学的な人間理解だとして批判する。

他方でハイデッガーは実存論的な身体論の観点から人種概念を捉え直そうと試みている。だが実存論的な人種概念といえども、民族にとっては根源的なものではなく、あくまで「必要条件の一つ」にとどまる。

いわゆる「存在史的反ユダヤ主義」をめぐる問題の一端は、ハイデッガーの人種論に関する以上の論点が整理されていないことに起因する。

(4) さらに2018年度は、トラヴニーの主張する「存在史的反ユダヤ主義」の妥当性を検討するために、1930年代後半から1940年代にかけての資料を手がかりにして、ハイデッガーの存在史的思索における「反ユダヤ主義」の位置づけを試みた。研究の結果、ハイデッガーの想定する反ユダヤ主義とは、その「反」の構造上、本質的にユダヤ教に捕われざるをえない「単なる反対運動」であることが明らかになった。他方でハイデッガーが定位する「別の始源」は、ユダヤ(キリスト)教、およびそれと深く結びついた形而上学の歴史の外部に位置する。このことから、存在史的な視座に依拠した「黒ノート」のユダヤ批判は、ハイデッガー自身の立場からすれば、単なる反対運動(反ユダヤ主義)とは言えず、むしろ形而上学の歴史を画定するとともに別の始源への移行を準備する、いわゆる「形而上学の超克」の一環とみなすことができるのではないかと、という示唆をえた。

本研究を通じて、ハイデッガーのナチズムとのかかわりが哲学の再始源化を背景にしたメタポリティーク構想に基づくこと、およびそこにはナチズムの人種主義に対する批判だけでなく、ハイデッガー自身の実存論的な人種論も含まれることが明らかになった。そしてこの人種論の解釈をめぐって、多くの先行研究は問題を抱えている。今後はこの点を引き続き検証していくとともに、「黒ノート」のユダヤ批判の内実を、形而上学の超克の観点から解明していくことにする。

#### <引用文献>

Peter Trawny, *Heidegger und der Mythos der jüdischen Weltverschwörung*, Frankfurt a. M.: V. Klostermann, 2014

Donatella Di Cesare, *Heidegger, die Juden, die Shoah*, V. Klostermann: Frankfurt a. M., 2016

Martin Heidegger, *Anmerkungen I-V (Schwarze Hefte 1942-1948)*, Gesamtausgabe, Bd. 97, Frankfurt a. M.: V. Klostermann, 2015

田鍋良臣、ハイデッガー「黒ノート」の研究 「考察II-VI」を中心に、*哲學論集*、第62号、2016、1-20

Dieter Thomä, „Wie antisemitisch ist Heidegger? Über die *Schwarzen Hefte* und die gegenwärtige Lage der Heidegger-Kritik“, in Marion Heinz und Sidonie Kellerer (Hg.), *Martin Heideggers »Schwarze Hefte«: Eine philosophisch-politische Debatte*, Berlin: Suhrkamp, 2016, S. 211-233

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

田鍋良臣、ハイデッガーの人種論 総長期の思索を中心に、現象学年報、査読有、第35号、2019(掲載決定済)

田鍋良臣、ハイデッガーの信仰論 「黒ノート」に定位して、哲學研究、査読有、第604号、2019(掲載決定済)

田鍋良臣、轟孝夫著『ハイデガー『存在と時間』入門』の書評、実存思想論集、第33号、2018、205-208

田鍋良臣、ハイデッガー・ナチズム問題再考 メタポリティークの視点から、大谷學報、査読有、第97巻第2号、2018、39-57 <http://id.nii.ac.jp/1374/00006386/>

[学会発表](計4件)

田鍋良臣、ハイデッガーの人種論 総長期の思索を中心に、日本現象学会第40回研究大会、2018年、11月18日、東京大学(東京都文京区)

田鍋良臣、ハイデッガーの「反ユダヤ主義」について、日本宗教学会第77回学術大会、2018年9月8日、大谷大学(京都府京都市)(宗教研究、第92巻別冊、2019、196-197、要旨掲載) [http://jpars.org/journal/bulletin/wp-content/uploads/2019/01/vol\\_92.pdf](http://jpars.org/journal/bulletin/wp-content/uploads/2019/01/vol_92.pdf)

田鍋良臣、ハイデッガーのメタポリティーク構想 「再始源化」をめぐる、日本倫理学会第68回大会、2017年10月8日、弘前大学(青森県弘前市)

田鍋良臣、ハイデッガー「黒ノート」における唯一神批判について、日本宗教学会第76回学術大会、2017年9月16日、東京大学(東京都文京区)(宗教研究、第91巻別冊、2018、197-198、要旨掲載) [http://jpars.org/journal/bulletin/wp-content/uploads/2018/01/vol\\_91.pdf](http://jpars.org/journal/bulletin/wp-content/uploads/2018/01/vol_91.pdf)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。